

植物科学の未来は明るいのか

内藤 健

今回のお話をきいたとき、私の頭に浮かんだのは30年後ではなく30年前のことだ。まだ小学生だった私は、理科室の前に貼られたポスターを繰り返し見てワクワクしていた。「夢のバイオテクノロジー：細胞融合でポマトを作る」という内容だった。映画「ゴジラ vs ビオランテ」が制作されたのもちょうどその頃だったはずだ。ゴジラ細胞と植物細胞の融合によって生まれた怪獣がビオランテ。細胞融合という技術はそれくらい世間の注目を集めていたが、ポマトはいつまでも夢のままだった。

ポマトの話に胸を踊らせてから5年が経った頃。高校2年生の私はNHKスペシャルで遺伝子組換え技術の特集を見て衝撃を受けた。特に遺伝子組換えトマト「フレイバーセイバー」に心から感動した。これなら本当に夢のような作物を作れるのでは。そう思った。しかしそれから25年経った今、夢のような作物はまだやってこない。

さらに5年。私は大学生になっていた。当時のキーワードは「ゲノム」だ。ゲノムが読めれば全てが分かる、育種も思いのままになる、と講義で繰り返し聞いた。でも、シロイヌナズナやイネのゲノムが、人々の生活を大きく変えるようなことがあっただろうか。

次の5年後、私が学位を取った頃に次世代シーケンサーが出て、その5年後には自分がアズキゲノムを解読するようにならなくなってしまった。そのまた5年後にはナノポアが出てきて、今やゲノム解読なんて20万円で、学生にもできてしまう。まさに夢のような話だ。

でも、こういう技術革新を夢のようだと思っているのは研究者だけなんじゃないか、とも思う。この30年間、植物研究者たちが約束してきた夢のような未来は、どこに行ってしまったのだろうか。役に立つかどうかで研究を判断するな、と多くの研究者は言う。確かに基礎研究は大切だ。でもその大切さを理解できるにはある程度の教養が必要だし、人によっては基礎研究なんて芸術と似たような「金持ちの道楽」にしか見えないかも知れない。国の財政赤字が膨らむ一方な現在、研究費なんかより困窮した人々の支援や災害復興に税金を回すべきだという意見が出るのは当然だと思う。そんな状況なのに、植物科学の明るい未来を自由に語る？そういう無邪気な研究者の言動が、世間の反発を買うというのに。

でも、そんな状況だからこそ、30年後まで私はアピールし続けよう。野生植物の適応機構が食糧危機を回避する鍵だということを。ワイルドでセクシーな野生アズキの驚異的な多様性を。何より、セクシーという言葉を使ったのは進○郎よりも私が先だということを。

そしていつか必ず私は私の約束を果たす。約束とは、海水で育つ作物を作ってみせるということだ。だからたとえ植物科学の未来が暗くとも、私の未来は明るい。少なくとも私にはそれで十分だ。